

アポリナリー・ニコラエヴィチ・ヴァスケレセンスキーと 日本におけるその活動

M・E・マレヴィンスカヤ

東京大学史料編纂所とロシア国立海軍文書館とのかかわりは、九年前に始まります。

サンクト・ペテルブルグと東京は非常に離れておりまして、その距離を何とか縮め、我文書館所有の貴重な史料類をより有効に利用していただくために考え出されたのが、ある共同研究プロジェクトでした。まさにその当時、日本、および我国の側の共同研究に関する史料をも所有しております、海軍文書館の史料の基本的概要が、まず皆様方に提示されましたが、さらにその三年後、このテーマを進展させ、ロシアの海軍人たちの軍事報告書の公開準備がなされました。ここにも上記テーマに関する興味深い情報が多数見出されます。

我々文書館員と我々の主要な課題は、歴史学研究者のために、史料の個々の様相、あるいは、あるテーマに関する史料の何らかの総体を明らかにし、利用可能とすることです。

このようなわけで、今日は、海軍の駐日武官、アポリナリー・ニコラエヴィチ・ヴァスケレセンスキーの活動について、お話し上げたいと思います。海軍武官【Морской агент】とは、現代の言葉で申しますと、大使館付海軍武官【Военно-морской attaché】のことです。

我が文書館には、非常に多数の海軍武官の報告書類が残っており、その内には、日本からの報告書も含まれています。もし、皆様のうちのどなたかが、この史料をお使いになり研究をなさる可能性がございましたら、

これらの報告書は、現在私たちが調査しておりますテーマ、すなわち、日本史や日露関係史のさまざまな情報の運び手となるという、私の主張をご支持いただけるものと期待致します。

では、ごく簡単に海軍武官の一連の活動に付いてお話し申し上げますと思います。我々が調査致しました時期におきまして、彼らは海軍中央参謀本部【Морской Генерального Штаба || Генштаб】の長官に服属し、同本部長官の推挙を経て、皇帝の命令により、任命、あるいは交代させられています。海軍武官は、ロシア海軍中央司令部に、諸外国の軍事力や軍事資産についての情報、当然まず第一に、海軍力についてのものを、報じるために任命されていますが、と、同時に、可能な限り、海軍省中枢の意向を実行することもその目的とされました。

海軍武官の報告には、ある国家の内政、外交、国民性、国家の財政状況、経済状態、軍事力の状況が報じられています。情報を収集する方法は、歴史を研究する、文学や新聞雑誌報道を監視する、社会活動家と接触する、といったものでした。

それらは、入念に検討され、可能な限り審査され、たまたまそういう結果になっただけのような性格は、採用されないようになってはなりません。予算や【軍事】支出の配分に付いての情報はすべて、必ず個人的なコメント付で報告されました。¹⁾ 軍事報告書には、海軍武官の職務への任命の日から番号が付されています（これは、A・N・ヴァス

クレゼンスキーの活動の評価の意図を持ってきます。⁽²⁾

さて、直接、アポリナリー・ニコラエヴィチ・ヴァスケレンスキーの人間性と活動にお話を進めたいと思います。この部分は、疑いなく、日本の皆様の特別の注意に値するものと思われまので、まさにそれ故、お話を少し後まわしにしました。

一八七九年六月二十三日、サンクト・ペテルブルグで下士官の一家に生まれます。一八九四年八月一日、海軍士官学校生徒になり、一八九九年九月十四日、士官の第一歩として少尉に昇格します。海軍士官学校終了直後、第一艦隊乗務員に登録され、一九〇〇年一月から、当直士官としての任務で太平洋艦隊に属する巡洋艦ザビヤカ号に乗り組み、一九〇一年十一月二十二日、在太平洋海軍統括参謀本部付きに任命され、中国で義和団の乱鎮圧に参加、このことによりタニスラフ三等勲章受章、また、中国遠征を以って銀メダル受章しています。一九〇三年四月六日、勤務功績により大尉に昇格。一九〇三年八月、海軍中央参謀本部海軍教育部配属。一九〇四年四月十四日、太平洋艦隊参謀本部主任将校任命、一九〇五年二月、再び海軍中央参謀本部勤務。

一九〇五年秋、外務省は、海軍省に対し、来るべき対日外交関係樹立に際し、これに関連し、東京に海軍武官任命が望ましい旨申し出ます。

一九〇五年十月外務大臣B・N・ラムズドルフ伯爵に、日本の駐在武官はヴァスケレンスキーが任命される旨、伝達されます。⁽³⁾ 一方海軍大臣A・ピリレフは、十一月二十八日、皇帝に対し、駐日海軍武官制定に關し、海軍大尉アポリナリー・ヴァスケレンスキーを任命する旨上奏し、同日、皇帝の承認を得ました。⁽⁴⁾ 一九〇五年十二月十九日、海軍命令第六五三号文書でA・N・ヴァスケレンスキーは駐日海軍武官に任命されます。一九〇六年一月四日、ヴァスケレンスキーは、皇帝皇后両陛下に謁見し、この日、任地に向かいました。到着は、一九〇六年二月

二十五日。⁽⁵⁾

一九〇六年八月二十八日から、中国駐在武官も兼ねます。一九〇七年日本の勲章、瑞宝【*Священное содружие*】五等勲章を授与されます。一九〇八年四月十三日、少佐に昇格、一九一二年十二月十二日中佐。一九一六年七月三十日、勲功により大佐、この年、日本の勲章、旭日三等勲章受章。

その勤務記録から、我々が判ることは、彼がフランス語とドイツ語が堪能であったということ⁽⁶⁾です。

陸海軍一九一七年九月三日付命令により、海軍大臣第一次席B・P・ドウドロフ大佐が少将昇進にともない、現在の職を解かれ、A・N・ヴァスケレンスキー大佐に代わり、駐日海軍武官に任命されました。命令書に署名したのは、大臣主席兼最高司令長官A・ケレンスキーです。⁽⁷⁾ 一九一七年九月十二日海軍中央参謀本部長官・少将カブニト伯爵は、ヴァスケレンスキーに、B・P・ドウドロフの東京到着後、同氏に海軍武官の職務を引き継ぐことが必要であると、申し渡しました。⁽⁸⁾

あらかじめ予想されることですが、海軍武官の交代は、職務量の多さ故に、非常に時間がかかります。ヴァスケレンスキーの海軍武官在任中の報告書は、何と、ほぼ二千通にも達しますが、任務引き継ぎ後、彼を待っていたのは、長い休暇でした。⁽⁹⁾ ドウドロフが東京に到着したのは、一九一七年十月十二日、つまり、ロシアの首都でおきた事件【十月革命】⁽¹⁰⁾まで、もはやたった二週間しかない時期でした。海軍中央参謀本部のジェーラの中には、一九一七年十一月二十二日付の電信が保管されており、ここから判明することは、ペテログラードの海軍司令部がヴァスケレンスキーを捜索していたことですが、この事実が、まさにこの時期、ヴァスケレンスキーがまだ日本にいたことを間接的に証明しています。⁽¹¹⁾ 同年十二月十九日ソ連邦最高海軍省【*Верховная Морская Коллегия*】

は命令文書第二九号で、ドウドロフの解職と裁判にかけることを公表しました。彼に代わる駐日海軍武官職務の最適任者は、ヴァスケレンスキーであると再び認められたのです。⁽¹²⁾

外国の定期刊行物から判明することは、ヴァスケレンスキー大佐が一九一七年秋のロシア革命の後、亡命したということです。その後のことは判りません。しかし、亡命先には、日本から向かったであろう事は、想像できます。

追悼録から判明することは、ヨーロッパでの生活の初期の頃、生物学を専攻しマルセイユの大学を卒業したこと、一時期東京大学で教えたこととです。このことは、ヴァスケレンスキーが日本語が上手であったと仮定する根拠を与えます（これに対する間接的な証拠は、彼の一九〇六一一九一〇年海軍武官活動に関する公式報告書にもあります）。皆様にも、海軍士官の実に常ならぬ運命の急転にご同意いただけることと存じます。しかしながら、この事実は、東京大学が所有する文書史料を調査し、この興味深い人物について、共同事業を準備するために、海軍文書館と東京大学との連環となるでしょう。

（既に申し上げました追悼録からの）手持ちの緒情報によりますと、ヴァスケレンスキーは、気候が合わず日本を去ることを余儀なくされ、フランスに戻りました。死去したのは一九三〇年五月二十日マルセイユ、同地で葬られます。⁽¹³⁾

さて、今申し上げましたヴァスケレンスキーの職務歴から判ります通り、彼は、海軍武官としておよそ十二年を日本で過ごしました。通常の報告文書以外に、当文書館には、ヴァスケレンスキーが海軍武官として、日本、及び中国で行った活動に付いての同様の報告書が保管されておりますが、その内の一部は、一九〇六一一九一〇年の五年間のもの

で、「極秘」と印が押され、海軍中央参謀本部長宛に一九一〇年十二月に発送されています。

その中で、気が付かれますことは、この長い期間の最初の年は、過ぎ去った戦争【日露戦争のこと】に付き、さまざまな問題を考察することに費やされているということです。さらにこの後の基本的な関心は、スタッフの教育方法の確立や育成問題の研究に集中しています。

この報告書の中で、彼が特に言及していることは、この当時は、指令というよりも、むしろ直感と自発により行動していたとすることで、そして、そこには、当時訪れた港湾施設の一覧が引かれていますが、一九〇六年は五ヶ所、一九〇七年が四ヶ所、一九〇八年二ヶ所、一九〇九年八ヶ所と、むしろかなり控えめであることを指摘しなくてはなりません。彼は、二回、軍艦の進水にも立ち会っていません。

この報告書の特別編は、彼と一緒に働くことになった翻訳官たちに触れられています。

初期の頃は、翻訳官が、書籍からも毎日の新聞からもすべての翻訳をしていましたが、次第に、その役割は、報道機関の監視やヴァスケレンスキーが理解できない箇所の説明、公式文書の日本語への翻訳に限定されていきます（ここから、アポリナリー・ニコラエヴィチ・ヴァスケレンスキーは日本語が堪能であったとの結論が導き出されます）。

まさに、この報告書から判明することですが、一九〇九年彼と一緒に働いていたこの翻訳官が死亡し、それ故、新しい人間を雇わざるを得なくなりませんが、この者に対する給与負担は軽くなり、月四十円になっています（以前は六十円でした）。

さらに、この文書史料から判ることは、気候の特殊性が毎日の生活に影響を与えていたということです。「日本の気候、特に夏の厳しい数ヶ月間の破壊的影響で、すべての事物が、多かれ少なかれ、あつという間

にぼろぼろになる」と述べています。

日本滞在当初ヴァスクレセンスキーは、彼の前任者たちと同様に、横浜の借家に住んでいました。しかし、着任一年目にして彼は不便を感じました。というのも、職務がすべて首都に直結しており、そしてそこまでは、鉄道で一時間もかけて辿り着かなければならず、このことによる時間的損失は極めて大きかったからです。一九〇八年に彼は東京に移りましたが、彼自身の証言によれば、東京生活の一番の不便は外国人に適した住宅がないことでした。

彼は東京での生活状況について詳細に記述しておりますが、その中で、ヨーロッパ人に適合しているのは裕福な階級の家のみであるにもかかわらず、その階級の人たちは、自分たちに必要のない家であっても賃貸に出すことは、おのが沽券に関わりと見なしている、とされています。家の賃借関係は、基本的には、個人的な知り合いを通して行われていて、そのことから彼は、海軍武官のための土地の取得と家の建設を提案しました。この時期、彼は、長崎にあるロシア海軍の病院財産の整理にも関わることになりました。

我々が調査したこの件に関する報告書には、次のことが記されています。病院の敷地売却が難航していることを副官【аудиорант】から聞いた海軍大臣齋藤【実】大將は、この時期長崎での競売ではこの財産はただ同然でしか売れないことを知り、三菱商会の所有者、有名な富豪である岩崎を招いて、病院の敷地を購入してはくれまいかと示唆したと言います。⁽¹⁴⁾

ヴァスクレセンスキーの報告から、ある時期、彼は東京で男爵・陸軍大臣上原【勇作】中將から住まいを借りていたことが判ります。

既に上で触れました報告書の中では、ヴァスクレセンスキーが述べた希望を考慮し、東京にロシア海軍武官のための住宅建設の問題が一九一

一年に具体化されました。この問題に関しては、膨大な往復書簡が残されています。これにより我々は、東京の地価及び家の建設費がどのようなものであったか、またどう変遷していったかを知ることができます。

一九一二年の七月から彼は用地探索を積極的に行いますが、その情報を絶えず海軍中央参謀本部に伝えています。更に報告の一つの中で彼は、「土地の選択に際しては、場所的条件からみて、赤坂、麻布、四谷、麹町の四地区に絞ることになった」と伝えていきます。選定されたのは、ロシア大使館から一・五kmしか離れていないところにある土地でした。

一九一二年十一月七日に取引が成立し、二二二〇円の手付金が支払われ、合意に基づき、土地の所有者は一ヶ月以内にその土地に通じる道を整備しなければならなくなりました。この道は、その使用と維持費に関し、後で誤解が一切生じないよう、東京市に寄付されました。

ヴァスクレセンスキーは、この取引をロシア大使館名義で証書化しようと努力しましたがうまく行かず、また、海軍の出先機関という名義で手続きを取ろうとしたのもうまく行きませんでした。そこで、土地の売買はヴァスクレセンスキーの個人名義でなされました。このことが将来的に何らかの好ましくない結果をもたらすかもしれないことは想定されたいにも関わらずです。

登記は十一月二十八日にされ、建物建設については、東京在住のアメリカ市民建築家ガーディーナー氏に依頼することになっていました。というのも、この建築家はこの時期既に二十年以上東京で建築に携わっていて評判が高かったからです。⁽¹⁵⁾

一九一三年の報告書では、新しい建物への移転が完了し、日本国内の内政状況の進展および議会での党派間の争いを特別な注意をもって監視することを任務としていることが記されています。

更に、海軍省に出された一連の申請についても言及されており、その

中には、もし下請けの潜水夫サクライにより、装甲艦ペテロバヴロフスク号内から文書類が引き揚げられた暁には、それらを公にすることの可否に関し、参謀本部の依頼に従い、十二月に海軍省に宛てた公式な問い合わせも含まれています(報告書が書かれた一九一四年一月の時点では海軍省からの回答はありませんでした)¹⁶。

以上、極めて簡潔ではありませんが、一九〇六年から一九一七年までの時期におけるアポリナリー・ニコラエヴィチ・ヴォスクレセンスキーの日本における活動を考察しました。この考察はささやかなものではあります、彼の職務の規模、興味の幅を再現する可能性と、彼の活動に付き、(日本の文書史料によるものも含め)今後の研究方向をうち立てる可能性を与えてくれるものと思います。

- 【註】
- (1) ПГАВМФ. Ф. 418. Оп. 1. Д. 2869. Л. 15-19
 - (2) ПГАВМФ. Ф. 418. Оп. 1. Д. 2869. Л. 2
 - (3) ПГАВМФ. Ф. 418. Оп. 1. Д. 4443. Л. 2
 - (4) ПГАВМФ. Ф. 418. Оп. 1. Д. 4443. Л. 3
 - (5) ПГАВМФ. Ф. 418. Оп. 1. Д. 4443. Л. 11, 12, 16
 - (6) ПГАВМФ. Ф. 406. Оп. 9. Д. 720. Л. 6-12
 - (7) ПГАВМФ. Ф. 418. Оп. 1. Д. 4541. Л. 70
 - (8) ПГАВМФ. Ф. 418. Оп. 1. Д. 4541. Л. 73
 - (9) ПГАВМФ. Ф. 418. Оп. 1. Д. 4541. Л. 75
 - (10) ПГАВМФ. Ф. 418. Оп. 1. Д. 4541. Л. 87
 - (11) ПГАВМФ. Ф. 418. Оп. 1. Д. 4541. Л. 88
 - (12) ПГАВМФ. Ф. 418. Оп. 1. Д. 4541. Л. 90
 - (13) «Морской журнал». 1930 г. No. 30. 【海軍雑誌】三十号、一九三〇年
 - (14) ПГАВМФ. Ф. 418. Оп. 1. Д. 2899. Л. 359-386.

- (15) ПГАВМФ. Ф. 418. Оп. 1. Д. 4510. Л. 37-50, 64-68.
- (16) ПГАВМФ. Ф. 418. Оп. 2. Д. 42.

(翻訳 有泉和子)

